

## 方法としてのストリート —管理社会における自律した生存領域の創造に向けて

猪瀬 浩平  
(PRIME 主任)

### 1. 規律社会から管理社会へ

本稿のテーマは、管理という視点でストリートという空間について考察することである。現在、人間は管理の媒介なしに存在し得ない。平和学の中で本稿の意義を提示するならば、現在、人間に対する〈管理〉が様々なレベルで進行していく状況において、私たちが自律した生存領域を如何に生み出せるのかを考察する点にある。この時ストリートとは、もっとも先鋭的に管理が進行する場であるとともに、それに対する抵抗の萌芽が見いだされる場である、とも考えられる。

フーコーが語る近代社会における支配とは、たとえば国家や大企業のような巨大な存在が、個人をその属性に応じた場所（たとえば学校、工場、病院、監獄）にそれぞれ監禁する形をとる。ここでは訓練される中で、人々は内面をもつ道徳的な個人に、あるいは自己規制をする主体に変えられていく（東+大澤2003：35）。ドゥルーズは以下のように整理している。

フーコーは規律社会を十八世紀と十九世紀に位置づけた。規律社会は二十世紀初頭にその頂点に達する。規律社会は大々的に監禁の環境を組織する。個人は閉じられた環境から別の閉じられた環境へと移行をくりかえすわけだが、そ

うした環境にはそれぞれ独自の法則がある。まず家族があって、つぎに学校がある（「ここはもう自分の家ではないぞ」）。そのつぎが兵舎（「ここはもう学校ではないぞ」）、それから工場。ときどき病院に入ることもあるし、場合によっては監獄に入る（ドゥルーズ2007:254-255）。

これに対して、近年のデジタル・テクノロジーの発展が可能にしたのは、もはや、人々を必ずしも、監禁することも、その内面を支配することもなく、見えない管理システムの内側に取り込み、時に本人の意図とは無関係にその駆動に参加させてしまう事態である。規律社会（規律訓練型権力）から、管理社会（環境管理型権力）への転換である。この点について、ドゥルーズは次のように語っている。

監禁は鋳型であり、個別的な鋳造作業であるわけだが、管理のほうは転調であり、刻一刻と変貌をくりかえす自己＝変形型の鋳造作業に、あるいはその表面上のどの点をとるかによって網の目が変わる篩に似ている（ドゥルーズ2007:359）

管理社会の中で駆動する支配の装置は、如何なるものなのか。川島建太郎は、規律社会における

(私の言葉でいう「人間開発」のための) 支配の装置をパノプティコン(一望監視装置)としたうえで、管理社会における装置を監視カメラに見る。監獄や精神病院のように、パノプティコンにおける監視は閉じた監禁環境を基礎とし、主体同士を分離し、個々人を隔離する。それに対して監視カメラの視線は、情報やデータに依拠し、開けた交通空間に行き来する「散逸」した主体に向けられる。そして文化的・経済的・物理的に交通がおこる空間において、その流れの阻害要因を取り除きながら、円滑に運営されるようにする。監視カメラの視線は主体の身体と精神を規律化することに関心をもたず、だから主体に過度なストレスを感じさせることもない(川島2008:198)。このような管理を生み出す環境の中で、私たちは「規律化されずとも従順に交通し、コミュニケーション能力のある動物(川島2008:200)」として、飼いならされようとしている。

この時、ストリートは人々をスムーズに交通させながら、監視カメラによって常に視線を向けられ、行動を記録される場として立ち現れるだろう。

## 2. ストリートのディストピア：排除を巡って

しかし、これはまだ管理社会の一面に過ぎない。より重要なのは、従順であることを拒んだ際の排除の側面である。たとえば、管理社会において、私たちの前には多様な行為の選択肢が与えられている。しかし、スムーズな「選択」ができない場合、あるいは選択自体を拒んだ場合、与えられた自由の「外部」に排除されることになる。

ここで、管理社会を特徴づける別の装置に目を向けてみたい。

JR 東日本の電子マネー「Suica」のCM——コンビニのレジで、会社員のように見える若い女性がい買い物をしている。彼女は小銭で支払おうとし

て財布の中を探す。それでも小銭は見つからず、ポケットの中も探す。彼女の後ろに人が次第に並び、それが彼女を焦らせ、ますますたついてしまう。その傍ら、着物を着た中年の女性が、Suica をつかってスムーズにレジを済ませる。バックには、「Suica なら問題ない」というフレーズが何度も何度も流れている<sup>(2)</sup>。

このCMに描かれているのは何か。そのままを受け取れば、ICカードを使えばスムーズに会計ができ、ストレスを感じることなく買い物ができるその利便性であろう。しかし、このCMは公共広告としてみるができる。そこに込められたメッセージは、「立ち止まるな」ということだろう。つまり、ものを購入する欲望を抱いたのだとしたら、余計なことをせず、もたつくことなく、人にストレスを感じさせることなく、円滑にコトをすまして、その場から立ち去れということ。そしてそれができない人間は、白い眼で見られても仕方がないということだ。

ここでSuicaを利用してははずの自分が、いつしかSuicaによって行動の適格性を承認される存在、あるいはその不適格性の烙印を押されるべき存在に貶められていることを知るだろう。さらに、Suicaは、私たちの行動の軌跡の一つ一つを——どの駅で乗車して、どの駅で降りたのか、どこで何を買ったのか——を、記録している点において、私たちを管理する立場にあるとも言える。たとえ私たちが自分の過去の行動を忘れてとしても、システム上では逐一把握され、利用が可能な状態で保存されている。私たちの行動の軌跡は、私たちの記憶にではなく、ICカードの記録に保存される<sup>(3)</sup>。このとき私たちは、Suicaという主人を運ぶ乗り物となった、とは言えまいか？

ますますスムーズに移動ができ、ストレスなく欲望を満たすことができるよう、アメニティが整えられたストリートで、私たちは交通する。その限りにおいて、行きたいところに行く自由や、会

いたい人と会う自由を手にいれることができるだろう。しかし、その許容範囲を超えた時に、ストリートはディストピアとしての顔を垣間見せよう。町を見まわしてみれば、ひとり分のスペースで仕切りがつけられ座ることしかできなくなったベンチがあり、野宿者を排除した後にアートのように見えるオブジェが置かれ、新しく段ボールの家を建てられなくなっている<sup>(4)</sup>。宮下公園がNIKEパークになり、天王寺公園が有料化されたように、公園整備が野宿者排除につながる。アートも、エコも、従順に交通しないものの排除に利用される<sup>(5)</sup>。立ち止まる場所、佇む場所は次第に失われていく。

\* \* \* \* \*

地下鉄に乗っていた。混雑した時間だったのに、その車両はすいていた。座席が空いているなあと、隣の方を見たら、強烈な匂いを感じた。席には路上生活をしているのだろう男性が座っていて、彼の周りには誰もいなかった。次の駅につき、扉が開き、乗ってきた人びとは、奇跡的に空いているのを喜び、急いで席に座るのだが、直ぐにその匂いと存在に気付いて、次の駅に着くころには、決まりが悪そうに立ち上がり、隣の車両に移って行った。

居場所を獲得した喜びは、すぐに不愉快さに変わる。しかし、その感情は「正しくない」ことに気付いて、咄嗟に否定する。否定した先で、居心地の悪さを感じ、隣の車両に移る。すると、途端に彼の存在は現実性を帯びなくなって、気づけば全てがなかったことになる。移った車両では、自分にあてがわれているのは、混雑した中のほんの僅かな空間である。いつもは鬱陶しい他者の肉体的な身近さは、このときだけは、ぬるま湯のような安逸を与えてくれる。隣の車両の広大な空間には、もはや目を向けられることはない。

私たちに与えられるのはほんのわずかな空間で、そこは常に他者の肉体との競合関係の中にある。協働することはほとんどまれで、多くの場合は僅かでもその自由を獲得しようとせめぎ合っている。せめぎ合っているからこそ、それぞれの空間はますます狭いものになる。

一方、彼に与えられた居場所は広大で、でもそこは市民社会の〈外部〉にある。

彼と空間を共にした記憶には、何処にも居場所がない。

彼を排除するのは、彼らではなく、権力でもない。彼を排除するのは、〈私たち〉であり、〈私たち〉の良識である。そして、彼を排除している〈私たち〉自身が、いつしか〈私〉をも排除している。

重要なのは、このストリートのディストピアそのものの中に、公共空間の萌芽を見出すことである。

### 3. バリアフリーから、迷惑へ

ここでストリートをめぐる他の実践へと、視点を少しずらしてみよう。

バリアフリーの発想は、一方で洗練された同化政策の側面を持っている（杉野1997）。公共施設にエレベーターが設置される。すると、階段で重い車椅子でかついで登る面倒はなくなり、階段をかついでもらって登る居心地の悪さからは解放される。しかし、エレベーターが動かなくなったら、エレベーターを設置するお金が尽きたら、その先に彼の居場所は残っているのだろうか？

しかし、駅のエレベーターができたのは、何も「バリアフリー」とか、「ユニバーサルデザイン」とか、そういう理念があったからではない。毎日障害のある人が利用する中で、駅員やたまたま通りかかった人が手助けし、時に駅員に介助者がいないからと乗車拒否をしてもめ、そして手伝ってくれた駅員が腰を痛めるといった一連の出来事の

延長でのことである。暮らしは不安定だったが、そこには様々なぶつかり合いと、触れ合いがあり、その衝突の中で創意工夫が生まれた。同じように、地域で生活するための生活ホームが生まれ、働く場としての小規模作業所や授産施設が生まれ、組織も法人化され、市や県の福祉制度が整備されていった。

エレベーターも、エスカレーターもない時代、階段を登っていたのは、車椅子に乗っている人でも、それを担ぐ人でもない。車椅子によって媒介される、障害のある人と担ぐ人とが一体となって、階段を上っていたのではないか？<sup>(6)</sup> 主体が誰で、客体が誰と単純に振り分けられるわけではない。

埼玉県東部で障害のある人も、ない人も共に生きる地域を目指して活動する「わらじの会」は、障害者と健常者が分けられた「地獄」を、自らの生の証とひきうけ、世界になげかけてゆくことに、ほのかな希望を見出す。そのメンバーの一人、橋本克己氏。幼いころ、聾啞、弱視、下肢マヒの重複障害のため、就学免除にされ、ほとんどの時間を、家の中で生活した。1970年代末にわらじの会が結成されたころ19歳だった彼は、その活動に参加し、街に出始めた。最初は仲間と一緒にだったが、次第に彼は手こぎ車いすをつかって、一人で街に出るようになる。

画伯の生き方の基調をなすと思えるのは、やはり「迷惑」である。彼の存在を有名にした最たるものは、交通渋滞だ。チェーン式車椅子の後部に普通の手動車椅子をひっかけて街に行く。駅で手動車椅子に乗り換えて、電車に乗る。(中略) 家と駅を結ぶ片側一車線の幹線道路は、約二キロの区間が大渋滞になる。ホーンや怒声が飛び交っても、聴こえない彼は悠然とこいでゆく。毎日のように彼に遭遇するタクシーの運転手の間では、「車椅子のアンチャン出現！ 迂

回必要です」という無線が飛び交うようになる。(中略) さまざまな人々とのキャッチボールの中で、「迷惑」は地域を耕してゆく(山下2010:38-39)。

以下は橋本が駅の階段を登る場面である。

見ていると彼はするすると車椅子を動かし、改札へ上る階段の下でピタリと止まった。そうしてじっと前方を(つまり階段を)にらんでいる。どうなるのかな、と思ったとたん、学生が二人克己くん近づきながら話しかけている。もちろん克己くんが言葉で応じられるわけではないのだが、察するに

学生① 上に行くんですか？

克己 ウイイヒヒ(とニコニコしながら上を指す)

学生② (車椅子をちょっともってみて) 重いよ、一人じゃムリだよ

克己 (ニコニコ)

学生① すいません、手伝ってもらえますか？(通りがかりの人に声をかける)

学生② すいませーん

というようなやりとりがあったのだろう。それからあつというまに人が集まり、克己君は車椅子ごと上へ運ばれて行った。

この克己君の実力(?)を見せつけられ、私はショックを受けた。私が愛想をふるって上り下りする階段を、彼は無言で上ってしまう。うーん「障害者」のキャリアの差だろうか。いや、それだけではないなにかがある。たくましさとつかふてぶてしさとつかうか。街なかで「自分の位置づけ」みたいなものをよく心得ている。克己くんはこの街に根づいているんだな、きっと(山下2010:40-41)<sup>(7)</sup>。

このように障害のある人と、ない人とが、あら

はじめ整理された枠組みに収まらない形で出会う機会は、実は常に存在している。例えば、いつもは地上に上がっていくエスカレーターが、車椅子の人を降ろす時に逆送する。楽に登れたエスカレーターの逆送は、混雑を生み出し、私たちを不愉快にする。その不愉快さを否定するのではなく、その不愉快さと向き合う。この時、階段の動線の混乱や混雑という雑多な空間、不愉快さ・居心地の悪さという整理のつかない感情の中で、他者と共に生きる事態が生まれる。

ここでエスカレーターが逆走する事態は、それを不愉快に・居心地悪く思う人々にとっては一つの〈事件〉であろう。そしてまたこの迷惑な〈事件〉は、単なるスムーズに従順に移動する空間と変わってしまったストリートが、人と人との衝突と対話を生み出す公共空間に変質しえる瞬間でもある。

#### 4. 抜け道としてのストリート：新たな公共空間に向けて

ここまで考察を進めたときに、ストリートの新たな可能性を見出すことができる。つまり、それは拡張していく管理社会の中でも、時に既存の枠組みでは整理不能な〈事件〉をもたらす、公共空間を生み出す〈抜け道〉としてのストリートの可能性である。

ドゥルーズは〈事件〉を次のように語る。

〈事件〉の出現は一瞬の出来事です。重要なのは事件が出現する瞬間だし、とらえなければならぬのはその機会なのです。(中略) 私たちは完全に世界を見失ってしまった。世界を奪われてしまった。世界の存在を信じるとは、小さなものでいいから、とにかく管理の手を逃れる〈事件〉をひきおこしたり、あるいは面積や体積が小さくてもかまわないから、とにかく新

しい時空間を発生させたりすることでもある。(中略) 抵抗する能力はどれだけのものか、あるいは逆に管理への服従はどのようなものなのかということは、各人がこころみだ具体的な行動のレベルで判断される。創造〈と〉人民の両方が必要なのです(ドゥルーズ2007:354-355)。

管理社会は、秩序の全面化を目指す。気付け、我々の大学にしろ、職場にしろ、地域や個人の生活にも、隅々にまでそれが浸透している。それに対して、〈事件〉は無秩序をもたらす。大阪の釜ヶ崎をフィールドに活動する地理学者、原口剛は、セネットの『無秩序の活用』によりながら、無秩序と公共性の関係について、次のように語っている。

重要なことは、不安と挫折を経験した後に、どのように生きるか、という点だ。もっとも典型的なパターンは、自らを諦め、既存の社会秩序や権威に身をゆだねる受動的な生活に退行するものだ。そして、これが公共性の喪失を決定づけるものとして、数々の著作のなかでセネットが批判する態度である。

だがもし人が不安と挫折を経て、いかなる社会でも対人関係における苦痛と無秩序を避けることができないことを受け止めるとするならば、それは一転して他者を理解し、そこから公共性を育む力となる。(中略) アイデンティティの首尾一貫性を脅かした無秩序や他者性をむしろ、人間の公共性を押し広げる可能性に転化するのである(原口2009:57)。

ここで原口が主張するのは、人に不安と挫折をもたし、そのアイデンティティの首尾一貫性を揺るがすものとして無秩序を避けるのではなく、目の前にある雑多で、整理不可能な空間を受けとめ、そこから新たな公共性—公共空間の立ち上げ

を試みることである。

例えば、大阪の長居公園テント村では、行政代執行前の数年間、テント村の住民と地域の人々とが共存しながら生活してきた。怒鳴りこんでくる人や、石を投げる子どもがいる一方で、カンパを持ってくる人、テント村の焚火に当たりに来る人、テント村の住民や支援者が近隣の畑でつくった野菜を買いに来る人がいた。身近な公園に野宿する人が現れるという事態—事件を、近隣住民も野宿する人もお互いが引き受ける中で、公園は管理空間であることを超えて、公共空間として日々意味づけられ続けたのである（記録集編集委員会2007）<sup>(8)</sup>。

重要なことは、無秩序を引き受けるということではなく、そこに存在する他者の顔を直視するというだけでなく、みずからの顔も露わにすることである。このような匿名でありながら、存在の固有性が立ち現れる場を、文化人類学者の小田亮は〈あわい〉の空間と呼び、そこに管理空間とされたストリートを生活の場として取り戻す可能性を賭ける。

私たちは、「じぶんを解き放つことができる、匿名になれる空間」というと、顔見知りの関係のしがらみから解放される空間を思いがちである。しかし、《間身体的》な場としての〈あわい〉の空間において「じぶんを解き放つこと」とは、その場に自分の〈顔〉や身体を差し出すことにほかならない。それは、単一のアイデンティティや社会的役割の束や個人情報——覗き部屋の匿名性によって守られたプライバシー——に還元された「じぶん」を、〈顔〉のある関係の過剰性へと「解き放つ」ことなのである（小田2009）

ストリートに現れる他者（たとえば、地下鉄の男！）の〈顔〉の、その過剰なまでに生々しい現

前に対して、じぶんを解き放つ。たとえば盆踊りの輪の中には、あるいは駅前の立ち飲み屋には〈顔〉があり、踊り手同士・酔客同士は、お互いの名前を知らずに、〈顔〉馴染みになる。一方、Suicaには〈顔〉は刻印されておらず、ただ〈記録〉が残されて管理の材料となる。そして設備が整った町は、障害者の〈顔〉を直視することなくやり過ごすことができってしまう。

管理社会の全面化が進む中で、空間的な路上ですら〈事件〉はますます起きにくくなっている。しかし、それでも束の間に開かれた抜け道に、自律した生存領域を立ち上げるようとする。今必要なのは、そういった実践の多様な実例を集め、それらの間の対話と議論を繰り返しながら、私たちが管理社会に対峙するための言葉を紡ぐことである。

\* \* \* \* \*

3月11日、ストリートに無数の人があふれだした。

東日本を襲った地震が、東京の都市空間において現出したのは、交通システムが破たんし、家に向かって歩く無数の人々だった。私たちを管理していた、管理してくれていたシステムは破綻し、突如、路上に解放された。

確かにそこで交わりや、助け合いは起こっただろう。しかし、多くの人は夜の道を無言で歩いたという。

果たして、日常に裂け目ができたその時、ストリートには私たちの居場所があったのだろうか？

#### 註

- (1) 本稿は、2010年度明治学院大学国際平和研究所提供科目である、明治学院大学「現代世界と人間4／総合講座 平和開発人権」

(副題 ストリートと平和)の議論を踏まえて、同科目のコーディネーターである猪瀬が検討したことの研究ノートである。授業のスケジュールは下記のようになっている。

9月24日 猪瀬浩平 (PRIME 所員)「ストリートという回路：日本の都市空間における管理・排除・自由・共棲をめぐる」

10月1日 森本泉 (PRIME 所員)「ネパールのストリートとグローバル化」

10月8日 吉田弘一+わらじの会の人々 (わらじの会)「障害のある人とストリート：段差(バリア)を超えて／共に生きる」

10月15日 浪岡新太郎 (PRIME 所員)「フランスにおけるストリートの政治社会学：排除と分断から〈共にあること〉へ—排除されたムスリム系移民とオルタナティブグローバリズム—」

10月22日 砂川秀樹 (東京プライド・文化人類学者)「表現する場としてのストリート：セクシャルマイノリティの存在証明の政治」

10月29日 小松光一 (大地を守る会国際部顧問・PRIME 研究員)「ものと人が交わるストリート：農村と都市を結ぶ“市”という場」

11月5日 家成俊勝 (dot architects／建築家)「ストリートとアーキテクチャー：集団のクリエイティビティをめぐる」

11月12日 原宏之 (PRIME 所員)「公共圏としてのストリート」

11月19日 甲斐田万智子 (国際子ども権利センター)「ストリートと子ども：ストリートチルドレンの人権擁護」

11月26日 勝俣誠 (PRIME 所員)「アフリカの若者とストリート—ボクたちの映像

とミュージックで—」

12月3日 嶋田彩司 (明治学院大学教養教育センター教員)「日本文化におけるストリート：異次元への通路としての路地」

12月10日 原口剛 (青空大学主宰・地理学者)「北の『スラム』とストリート：都市再開発の暴力をめぐる」

12月17日 栗原彬 (水俣フォーラム)「路地・異交通・原っぱ：ストリートの政治社会学」

1月7日 猪瀬浩平「むすびはストリートで、」

(2) Suica 電子マネーライフ CM(OL 篇)。「Suica ならばスイスイお買い物♪ 女優・ミムラさんが、Suica でお買い物をしたことの無い OL 役を演じています。「細かいの、あります」と言いつつなかなか小銭が出てこない。結局あきらめてお札でお支払い。「そこは Suica じゃない？」日常にある、Suica を使うと便利なシーンを、テンポの良い音楽に合わせて表現しています」。 <http://www.jreast.co.jp/suicamoney/cm/gallery/index.html> (2011年4月11日取得) より。

(3) つまり、これは私たちの自己同一性が意識のレベルではなく、管理装置の上で成り立ってしまっている、という事態である。

(4) 排除オブジェについては、(五十嵐2004)を参照。

(5) 私が活動するさいたま市の見沼田んぼでは、高速道路の下にフェンスで囲われたビオトープがあり、看板上は環境保全がうたわれているが、結果として野宿者を排除する形になっている。このビオトープは現在、帰化植物のセイタカアワダチソウが繁茂している。

(6) 小倉虫太郎は、このような障害者と介助者

の関係を、ドゥルーズ／ガタリによりながら、「介助アレンジメント」と命名する（小倉1998：190）。

- (7) この文章は、もともと糸賀美香子さんが『克己絵日記』に寄せた文章。糸賀自身は中途障害者で、自ら「愛想を振りまき」手伝いを募って階段を登った後の反対側ホームで、橋本の行動の一部始終を観察している。
- (8) その日常の延長の先にあった行政代執行の場面では、強制排除の場面で協調される対立構図（行政—野宿者／警察—野宿者）に還元されないものを表現するため、芝居による抵抗が試みられた（記録集編集委員会2007：14）。

#### 参考文献

- 東浩紀＋大澤真幸2003『自由を考える：9・11以降の現代思想』NHK ブックス
- 五十嵐太郎2004『過防備都市』中央公論
- 猪瀬浩平2010「ストリートで授業する：2008－2009年度明治学院共通科目「ボランティア実習101」Go Westの記録」『明治学院大学 教養教育センター紀要 カルチュラル』4（1）：151－165
- ヴェリリオ、ポール2001『速度と政治：治政学から時政学へ』（市田良彦訳）平凡社
- 小倉虫太郎1998「私は、如何にして〈介助者〉となったか？」『現代思想』26（2）、青土社：184－191
- 小田亮2009「生活の場としてのストリートのために：流動性と恒常性の対立を超えて」関根康正編『ストリートの人類学』下巻 国立民族学博物館調査報告81：489－518
- 川島健太郎2008「パノプティコンから監視カメラへ—デジタル時代の監視戦略について」大宮勘一郎（編）『メディアシステムの闕』（「20世紀後半から21世紀初頭の日本におけるメディア革命の比較文化理論的研究」、平成17～19年度科学研究費補助金研究成果報告）：189－202
- 記録集編集委員会（編）『それでもつながりはつづく：長居公園テント村行政代執行の記録』記録集編集委員会
- 杉野昭博1997「「障害の文化」と「共生」の課題」、青木保他編『岩波講座文化人類学 第8巻 異文化の共存』、岩波書店：181－212
- ドゥルーズ、ジル2007『記号と事件：1972－1990の対話』河出書房新社
- 橋本克己1995『克己絵日記』千書房
- 山下浩志2010「障害が照らし出す地域：わらじの会の30年」わらじの会編『地域と障害：しがらみを編みなおす』現代書館：11－76